

熊野の
木林から

怪野の熊

其の(五) 串本の怪異(其の三)

和歌山大学
システム工学部
システム学科
環境システム
中島敦司教授

時、その無人の双島から美しい歌声が聞こえてくるようになり、村人達は気味悪がってまず島に近づかなくなつた。



天明飢饉之図(福島県津美里町教育委員会蔵、パブリックドメイン)。絵の中を詳細に見ると、その惨状、恐ろしい光景が記録されている。

大木も枯れていた。その時代は大飢饉もあって、人々は土地を離れ、一人の村人もいなくなつていた。悲しみと娘を哀れと思つた天狗は、海岸で大石を置き、双島には洞を作つて娘の霊を弔つた。田子の前の海岸、枯木灘には天狗が置いたとされる大きな石が数千もあり、今でもそれらを見ることが出来る。

江戸時代には大小合わせて三十五回もの飢饉があつた。大洪水や大地震、大火山の噴火による天候不良が発端とされる天明の大飢饉では想像を絶する飢餓が関東や東北を襲い、数十万とも言われる餓死者、疫病死者を出した。和歌山でも多数の餓死者が出たという。食を巡つての恐ろしいことも多々あつたようだ。そんな不条理や虚無感は、人々に妖怪の姿を意識させたのかも知れない。



田子沖に浮かぶ双島(そうしま)。

串本には、海と山をつなぐ怪異話もある。山が海にまでせり出している串本らしい話だ。串本の田子の沖に大きな山と小さな山の二つからなつてある双島(そうしま)がある。この島は、今から数百年前頃、どこからともなく一夜にして田子の前に流れてきたという。これだけでも十分不思議な話であるが、双島の不思議はそれだけではない。この島には水がないために人は住めないのだが、ある

ところが、田子の奥にあるチノト山に棲んでいた若い天狗(てんぐ)が、声の主が気になつて島に飛んで見に行つたところ、ワンジュウ(ハカマカズ)の大木から美しい娘が現れた。この娘は「もう一月も水を飲んでいないので、水を飲みたい」と言うので、天狗は田子の池から水を汲んで飲ませた。天狗は、毎夜のように島に通い、いつしか二人は恋仲になつていく。天狗は双島通いの時に大きな羽音を鳴らしたため、村人はおおいに驚き、いつしか「天狗が双島へ夜泊りする」と噂するようになった。この噂は大峰山大権現の耳にも入り、権現様は修行中の天狗に大峰山に入るように命じた。天狗は修行を終えたら戻ると約束して大峰山に行つて修行を積み、大天狗となつて双島へ戻つて来た。しかし、長い年月で木々は枯れ、ワンジュウの

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

